

# 記憶障害者生活支援システムの研究開発

実験成功。事業化中断。【平成16年度助成事業】

## 研究開発事業の概要と背景

当時、交通事故や脳卒中による損傷により記憶障害などを起こす「高次脳機能障害」を負った人だけで全国で30万人程度いることが、厚生労働省の推計で分かっていた。

更に加齢とともに増加傾向にある認知症患者も含めると、記憶障害者の範疇に入る人はその数十倍とも考えられた。

研究開発当時は、仕事に関して現役世代の人が、外見上の身体障害が軽傷のことが多いこともあって、障害を知らない人から誤解を受けやすく、人間関係のトラブルを繰り返したりして社会復帰が難しくなっている要因を、少しでも、このシステムにより取り除けることができれば、彼らを社会復帰させることで、経済的にも社会貢献できると考え、開発を行うことにした。

高次脳機能障害の専門家である医師により基礎研究はできており、その実用化の可能性を確かめ、すでに実用化されている方法に関して、新たな応用方法を探索することを目的として、共同研究する環境もできていた。

## システムの開発

一般のスケジュール(行動)管理とは、利用者が情報を取りにくいシステムであるが、我々の開発しようとしているシステムは、利用者に向けて個人別のスケジュール(行動)情報を時間スケジュールに沿って、発信するシステムである。

単に時間だけでなく、記憶障害者の現在位置の情報も把握するシステムを構築することで、記憶障害者の日常生活の記憶を「補い」、自立や社会復帰が可能になるように支援できることを目的としている。

そのため、もっとも利便性の高い、GPS機能を持った携帯電話を使って、次のような情報を利用者に提供するシステムを目指した。

- ① 日常生活をスケジュール化して、タイムスケジュールに従って、行動内容を知らせる
- ② 記憶障害者の特徴としては、行動直前のアナウンスではパニックを起こしやすいので、目覚まし時計のスヌーズ機能に似た、事前のアナウンス+行動するまでは何度もアナウンスをする方式
- ③ 薬の服用などの重要事項は、利用者が実際に行ったかどうか双方向通信機能により確認し、

飲み忘れの防止+二重服用の防止機能をもたせる

- ④ 外出時には、その行動位置をGPS機能で把握し、適宜適切な指示を出す
- ⑤ 同時に、予定にない動きが出た場合には、利用者に注意を喚起し、必要に応じてヘルパー等への緊急連絡を行う

## 事業化の状況

応用化のための基礎実験は終了したが、2年目は採択されなかったため、中止し、事業化を中断している。

## 今後の展開

現在は、研究当時と比べ、携帯電話やGPSを取り巻く環境はものすごく進化している。

また、不自由なく携帯を使える高齢者も驚くほど増えている。

そのため、当時、記憶障害者や高齢者は携帯を使えるとは思えないので、そのようなシステムは意味が無いと批判する人も多かったが、今なら、その批判はほとんど当たらないと考える。

必要な実験は終了しているし、環境も良い方向に変化しているので、共同で事業化をする会社が現れれば、一緒に行いたいと考えている。

## 事業実施データ

### ヒューテック株式会社(東京都)

当時、審査あり請求の特許を出願した。